



’99 深川市青少年カナダ交流訪問団の報告会

深川国際交流協会 海外交流部会長 宮田 嘉明

去る 11 月 14 日、深川ホテルにて第 3 次深川市青少年カナダ交流訪問団の報告会が行われました。

当日、会場には交流協会関係者、市関係者、団員の父母等、たくさんの皆さまにお集まりいただき、出発から帰国までの約 2 週間、カナダでの貴重な体験、楽しかったこと、困ったこと、ピクトリアへの小旅行のできごとなど、写真やビデオを使って報告が行われました。

今回の訪問団は、今まで 8 名だった団員数が 10 名に増員され、高校生 7 名・中学生 3 名と、高校生中心の訪問団となりました。

3 名の中学生にとっては、色々と大変な

こともあったようですが、それぞれ立派に訪問団としての目的を達成してくれたと思います。

特に、最後のさよならパーティーの中では、お世話いただいた大学関係者、ホストファミリーの方々とかから打ちとけ、国籍を越えた人と人の交流が図られたように思われました。

2 週間という短い滞在にもかかわらず、帰国時には小雨まじりの中、涙の別れとなり、国籍や言葉が異なっても“人と人のつながりがどれだけ素晴らしいものか”ということが、子ども達の心に深く刻み込まれたのではないかと思います。

今後、このようなすばらしい交流事業が深く、そして長く続き、たくさん子ども達にその感動を体験してほしいものと思います。

最後に、この交流事業にたくさんの皆さまのご理解、ご協力をいただきましたことに心より感謝申し上げ、今後子ども達だけにとどまらず、深川市民がこの交流事業をきっかけとし、広く交流を持てること



国際理解講演会

深川国際交流協会 国際理解部会長 中川 良平

青少年カナダ交流訪問団報告会のあとを受け、国際理解講演会が開催されました。

今回は、講師にキース・ブランズマ氏(留萌市教育委員会 A E T)と、荒閑誠二氏(留萌市立東光小学校教諭)をお招きし、まず最初にキース・ブランズマ氏の「私の日本滞在期」と題しての講演からスタートしました。

文化の違う国での様々なエピソードをユーモアたっぷりに話していただきました。(コンビニに車を停めたらエンジンは切りましたなど)

続いて、「当世ロシア人気質」と題して、荒閑誠二氏に講演していただきました。日本とロシア、北海道とサハリンの相互交流が進み、日露合併事業の増大の一途をたどる昨今。稚内からコルサコフまで船で 6 時

間、ユジノサハリンスクまで飛行機でわずか 30 分、地理的にも時間的にも近くなったことが実感される今日この頃。

互いの過去を意識せずに付き合える日がすでに来たのか否か。

いずれにせよ、ロシアを知る一助になったのではないのでしょうか。



北海道・カナダ姉妹都市会議およびカナダ・スクール

深川市企画課 荒井 清光

10 月 29 日(日)深川市において、北海道・カナダ姉妹都市会議が開催され、同日、北海道カナダ協会と深川市、深川国際交流協会の共催でカナダ・スクールが開催された。

姉妹都市会議は北海道とカナダの一層の姉妹都市交流の促進を目的にしたもので、現在カナダと姉妹都市提携を結んでいる道内の自治体が参加し、「市民・自治体一体となった姉妹都市交流をいかに進めるか」

をテーマに小滝理事長の司会で、それぞれの自治体や民間交流団体の抱える課題などの報告や意見・情報交換が行われた。

深川市の姉妹都市であるカナダ・アボツフォード市からは、日加親善協会副会長エアー・フラビル氏が参加し、ジョージ・タフ会長からのメッセージやカナダ側の状況について発表があった。

カナダ・スクールは、国際理解を深める民間と行政が一体となった姉妹都市交流の

推進を目指したもので、カナダに関係の深い講師としてカナダ大使館広報・文化部のマット・フレイザー氏を迎え、今年四月に誕生したヌナブット準州について、その経過と先住民政策などについて講演があった。また、引き続き行われた交歓会は、谷口副理事長の乾杯に始まり、終始にぎやかな交流となった。



重要な意味を持ったエアー・フラビル氏の来市

深川国際交流協会 理事長 小滝 聡

アボツフォード市の日加親善協会副会長 エアード・フラビル氏が 11 月 27 日深川にやってきた。身長が 188 センチにもなる大男で、どうみても日本の建物のサイズには合わない。ホストを引き受けた我が家の問題は、彼がドアを通る時にしばしば頭をヒットすることだ。そこで苦肉の策として、テープを天井からぶらさげ、注意を喚起するということにした。作戦はかなり成功し、ヒットの回数は激減した。それでも彼の頭には傷が残った。性格はいたって明るく、気さくで付き合いやすい。実務型で計画は着実に実現させる。さすがにコンピュータ会社を経営する人らしい行動派タイプの人だ。

今回、彼が深川市に来たのは、深川とアボツフォードの民間交流をより活発にするために、双方の関係諸団体にとって、交流のきっかけができるような橋渡しをすることであった。昨年の姉妹提携以来、市役所同士の連携は密接になり、双方の連絡体制もスムーズになってきた。もちろん大学間の交流も活発である。

しかし、民間の草の根レベルでの交流は必ずしも広がってはいない。そのきっかけを誰かが作らなければならない。エアード

の来市の狙いはそこにあった。

彼は言う。例えばロータリー同士が共同のプロジェクトを持ってないだろうか。双方が協力しあって、開発途上国に援助の手を差し伸べることはできるのではないか。そんなにお金をかけないで。例えば両方の国に有り余っていて、開発途上国では不足しているもの、老眼鏡などを集め途上国に送ってあげることなど、そんなに無理をしないことができる。また、幼稚園児同士がいろいろな作品を交換したり、小学生が同じように展示物や写真、地域を紹介するものを交換しあうこと、こうした気軽な交流が具体的な形となって現れるきっかけを作りたい。

滞在中、彼は多くの民間諸団体の人たちと面談した。商工会議所、ロータリー、ライオンズ、中高校生、幼稚園、福祉施設など精力的に日程をこなし、想定できるアボツフォード側の諸機関との交流をイメージしながら、そのきっかけを求めて話し合いが行われた。

いくつかの手がかりが見えてきた。高校生同士の文通を始めようということだ。文通といっても、英語のみではない。カナダ側からは日本語で書き、日本側からは英語

で書く。双方の語学力の向上に役立つというメリットがある。低学年の子どもたちであれば絵画作品などの交換を通してお付き合いができるはず。市内の訪問先の関係機関でも大きな興味をもってくれ、交流には前向きであった。

深川からの多くの情報を持ってエアードは帰国した。その後、何度か連絡があり、アボツフォードで具体的に交流をしたいと申し出ている高校生、幼稚園が見つかったそうだ。これを機会に着実に草の根を張りたいたいと思う。

滞在中、土日を利用して渡辺事務局長と私とで白金温泉に招待した。初めての体験となる公衆温泉浴場。初めちゅうちょしていたエアードも、すっかり気に入って3回も入浴した。日本の旅館が気に入った様子だった。ここでも2-3回頭をぶつけてしまったが。

彼の訪問が草の根交流の進展にとって、大きな意味をもったことは言うまでもない。

今後、この協会としても民間交流の橋渡しをする仕事を進める必要がある。そのためには隔年ごとに、今回のような協会同士の話し合いが持てるような仕組みを作ることとも考える必要があると思う。



いい旅 カナダ！

深川国際交流協会 事務局長 渡辺 優

深川神社のお祭りが終ると、我が街は秋の入り口。私も夫婦は深川の出口から一路、カナダへの旅だちになりました。初老の2人のカナダ行きは、私どもの生活の積み上げなんだろうとしみじみ思いつつ。

主に、拓大を窓口にして深川を訪れる外国の人びとのホストファミリーとして15年余、特にフレーザーバレー大学生の受け入れは5人で、カナダの息子や娘たちとの再会を願うことが実現することになり、心が豊かな旅になりました。

今年ホームステイしたカレンに夢を伝えると、彼女は親身になってエスコートしてくれたお陰もあって、観光バックツアーとは一味違った、親交を温め合うことが楽しみなスケジュールが出来上がったのです。

今日はL嬢と両親とのディナー。明日はDさんとCさんを囲んでのパーティー。私どもが持ち込んだ無菌バックライスを使った寿司パーティー。帰りの前日には、カレンファミリーとマウントベッカーの山頂近くで残雪を眼下に寒さに耐えたディナー等々、逢えた人たち、残念ながら逢えな

った人たちを含め、カナダの人びとのおおらかな気持ちと原始の森や湖の大地に身を委ね、語り尽せない良い気分の連続でした。

アボツフォードと深川の姉妹関係のステージが整い、そのレールに乗った安心感も気持ちのどこかにおいて、せっかくの機会に民間レベルの交流に役立つものがないかと考えてみました。

カレンがアボツフォードのフォトクラブメンバーだったことが幸して、深川と同クラブとの作品交流が約束され、深川のメンバーの作品を持参することができました。市役所ホールや公共施設、学校などでの巡回展を希望し、約束したので、きっと約束を実現してくれるだろうと期待しています。

私は3年前にアボツフォードを訪れた経験から、私流の恐れを知らない冒険心が初老2人のタクシー乗車や、セスナ機に搭乗しウィスラー地帯の氷河が連なる山脈を眼下に堪能したこと、またビクトリアの夜の街並みを白馬の車で活歩したことなど、数えきれないほどの思い出を作ることができました。ベリーファームに出没する熊が射

止められた現場に遭遇したハブニングも、いい旅カナダの印象を一層深いものになりました。

姉妹提携は友だちを越え親戚になったことを思うと、行政上の結び付きは当然ながら、経済・労働・文化・芸術・スポーツ等々の民間団体の自由な交流が深まること。さらには、これらの延長上に個々人のフレンドシップが培われ裾野が根づいていくことが本物の国際交流であることを信じてつ、これからも私どもの生活スタイルの一つとして慈しんで生きていきたいと思っています。

カナダギースが湖面にゆれる風景にあやかり、緑の芝草のハンモックに揺れた9泊10日のいい旅は、拓大諸氏のアドバイス、現地での土門（愛称ヒロ）氏のサポートがあったことに感謝しつつ。



深川市役所から3氏、アボツフォード市訪問

深川国際交流協会 理事長 小 滝 聰

去る8月31日より市役所から荒井、坂本、小林の3氏が約1週間の予定でアボツフォード市を訪問しました。市職員の研修をかねた訪問は今年から始まり今後も継続されます。3氏は第一回目ということもあり準備段階からカナダ側、日本側でかなりの綿密な連絡が行われ、双方の細部にわたる連携のもとに研修が実現しました。

3人がカナダ滞在中に現地でお世話役をしてくれたエアード・フラビル氏と笠原修氏から興味深いメールが届きました。

ここに抄訳し皆さんに紹介します。

エアード氏から9月1日付け

深川からの3人は11時3分にバンクーバーに到着しました。入国もスムーズで彼らはやがて私達の前に現れました。前もって写真をいただいていたので、彼らを確認することはいとも簡単でした。笠原さんが「深川」とかいた紙を用意してくれておりました。この日は時間の余裕もありました。そこでまず、昼食を買いにリッチモントの日本の食料品店に立ち寄り寿司を買って、アメリカとカナダの国境に向かいました。天気も良く、皆でアメリカとカナダの国境を歩き来しました。そのあと国境沿いのゼ口通りをアボツフォードに向かって走りました。車の右にはアメリカの牛、左ではカナダの牛がのんびりと草を食べています。柵もなければ監視カメラもありません。平和です。

アボツフォードの市役所に着いたのは3

時30分でした。そこで助役、モー議員、エド議員に会いました。またカナダ日本友好協会のタフ氏、須田さん、ストロング女史に会いこれからの日程について確認しました。その後深川からの3人はそれぞれのホストに連れられて一旦家に行くことになりました。私は荒井さんのホスト役でしたので、途中コスコに寄って鳥肉を買い、モー議員の家でのバーベキュー会場に向かいました。その時笠原さんに乗せました。荒井さんはモーさんの玄関に大きな日本の旗を掲げました。参加者の目印です。モーご夫妻にはこの準備に大変なご苦労をかけました。おかげで大成功でした。会場にはファーガソン市長、教育委員長、大学学長、大学関係者、拓大土門先生ら総勢40人の大パーティーとなりました。食べ物も豊富で150人分位はあったでしょう。本当に楽しい時をすごせました。

笠原氏から9月5日付け(カナダ日本友好協会会員宛て)

今、バンクーバーから戻りました。深川からの3人のその後についてお知らせします。まず、出発まで3人の荷物を私の車に積めるか心配でした。結局、トランクに2個、後部座席に1個積み、何とかになりました。最初、ロンドン・ドラッグに立ち寄り小林さんのカメラを買いました。そして銀行で両替をすませ、加藤さんの苗木農場、市川さんの水仙農場、井上さんの野菜農園を見せていただきました。戦後日本人がこ

の地で成功している姿に感動したようです。その後、コクイットラムで日本食の昼食をとり、博物館を訪問し、そこでストロー・インディアンの展示を見ました。北海道の先住民族との比較ができたようで意義深いものとなりました。そこからフェリーで川を渡り日本食品店の富士屋にでかけました。日本食の弁当を口にしたのは3時40分でした。彼らは日本食に飢えていたようで、インスタントの味噌汁を買い込んでおりました。

彼らの泊まるホテルはバンパシフィックで、私が用事のあった日本人テレビ局の近くでした。そこで、私へのインタビューを収録したビデオを受け取り、再び彼らとお会いしました。やっと一連のハードスケジュールが終わり、彼らが解放された瞬間でした。

ロイヤル・オーシャン・日本食堂に行きました。駐車した後、お腹を減らすため散歩をしたり、山口さんの経営する喫茶店に行ったりして、その間エアードさんと小滝さんからのメールを読んだりしました。

そして日本食レストランに入りました。この時の寿司、さしみ、それにビールは美味でした。さらに3人は私に泊まっていけとの申し出をし、私もそうすることにして当然ビールの量も増したわけです。彼らの部屋に泊り、さらにビール、ワイン、ウオッカ...を飲みました。

おかげで私も楽しい日を過ごすことができました。

姉妹都市<アボツフォード市>を訪ねて

深川市健康福祉課 小林 健二

今回行われた研修は、8月31日の午前7時過ぎに深川を出発し、9月13日午後11時過ぎに深川に到着する14日間でありましたが、職員の海外研修期間としては長いほうでした。

過去に行われた職員の海外研修の多くは、各機関・団体や民間会社などで企画する海外視察研修団の一員として参加するため、外国事情に詳しい旅行会社の添乗員も同行するので安心ですが、今回の研修は職員3名だけでの渡航であり、まして英語を話すことのできない我々にとって、海外への出発にあたっては期待と不安が同居する思いでありました。

千歳空港～成田空港～シアトル空港(アメリカ経由が安い)と航空機を乗り継ぎ、最終地カナダのバンクーバー空港に到着するまでかなりの時間を費やし、空港での乗り継ぎ、入出国審査、税関の通過などでは、それぞれの場面で英語力のなさを露呈するも『三本の矢』の例えにもあるように、3人で相談し協力しながら無事目的地に到着することができました。空港の到着ロビーで「深川」と書いた紙を持つ通訳の笠原さん(昨年、来市したアボツフォード市の訪問団の通訳をされた方)を見つけたときは内心「ホーッ」としたものであります。

アボツフォード市に着いて、その日の夕方には、ジョージ・ファガソン市長をはじめとする公務関係者、市議会議員、そして今回の研修受入れについて大変お世話になった日加親善協会関係者、また昨年の姉妹都市提携に深川市を訪れた方々、フレーザーバレー大学に交換教授としてアボツフォードに滞在している拓殖道短大の土門教授の家族など40人位の方々が、モントリオール市議会議員宅に集まり、私たち3名の訪問を歓迎するバーベキューパーティを開催してくれました。

アボツフォード市での研修は、伸びゆく姉妹都市の状況をよく理解してもらいたいとのアボツフォード市側の思いが非常によく伝わる

ほどに、短期間で数多くの施設と事業の視察研修が計画されておりました。市行政の説明窓口をしていただいた市総務部長のトリッサ・ストロングさんが研修の事前打ち合わせの際に、冒頭で言われた「今回の研修では短時間に多くものを見ていただくので覚悟してほしい」との言葉どおり、盛りだくさんの内容でありました。

カナダ到着直後からの研修は非常にハードに感じられました。時差ボケと睡眠不足が相まって、市庁舎内の視察の際にエレベーターを待っているときに、ふと軽いめまいがしたことがありました。しかし日々が経つにつれ、徐々に身体はカナダの生活に慣れていきました。

今回の研修の特徴としては、ホムステイがあげられます。アボツフォード滞在の5日間をホストファミリーにお世話になりましたが、どこの家庭においても親切にいただきました。言葉が通じないという問題もあり、お互いにどのようにして気持ちを伝えようかと戸惑う場面もありましたが、中にはお互いの性格や考え方が似ているのか、自分の覚えている数少ない英単語を並べただけで互いに伝えようとしていることが、何となく理解しあえるという人もいました。いずれにせよホストファミリーの皆さんは、深川から来た我々のことをとても気遣っておられました。その優しさと配慮にとても感謝しております。

市役所をはじめとする市関連施設の研修が終了した日の夕方に、トリッサ総務部長宅において、我々の研修の慰労と市役所の幹部職員との懇談を兼ねて、カナディアンパティ（用意された飲食物を自由に飲食する）を開いてくれました。丘の中腹に位置する新興住宅街に住む、総務部長宅のテラスから視線を丘の下、そして前方の山並みに向けると、その風景は深川市の高台から農業地帯を望む風景によく似ており、心に懐かしさと安らぎを覚えるものの、山並みの奥にそびえ立つアメリカの山、マウントベカが雪をいただいてそそり立つ姿を見ると、やはりカナダの雄大さを改めて感じざるを得ませんでした。

今回の研修では、主に市の事業をはじめとする公共の事業を視察することにより、アボツフォードについて多くのことを知ることができました。各事業の責任者から説明を受けたなかで、特に関心を持ったものは次のとおりであります。

市の職員体制、市議会の体制、女性の社会的地位、市の事業運営、市の開発計画と推進、レクリエーション施設の整備、コミュニティサービスの実施内容、民間企業の事業拡大への取り組みなどであります。

この他にも多くの施設や事業などを視察しましたが、それぞれの職場で働いている人達が自分の仕事に自信と誇りを持っている印象を強く受けました。特に、女性の活躍が目についたことは3人共同様に強く感じられたことでした。

この研修では、アボツフォード市に滞在中の貴重な体験とともに、職員3名の独自研修であったことから、一般的な職員の海外派遣研修では得られない、新たな体験が得られたものと感じております。姉妹都市提携の後、今回のアボツフォード市への初の職員派遣研修が、来年度以降の研修実施にあたり良き参考事例となるよう、今後の職務に活かしていく所存でございます。

最後に、この研修の計画段階から、アボツフォード市の関係者と連携を取り続けていただくなど、大変お世話になりました拓殖道短大の小滝教授、現地で通訳だけでなく我々の身の回りの相談などいろいろとお世話いただいた笠原氏に感謝し、本研修を終えての感想といたします。

日本語圏・英語圏文化交流...笠原氏日誌

通訳・笠原 修

今回の深川市からのアボツフォード市訪問に際し、現地で通訳として同行していただいた笠原修さん（アボツフォード市在住）の日誌がEメールで送られてきました。10ページを超える大作ですが、文化の違い、通訳としての気遣い・気苦労、訪問したメンバーとのやりとりの詳細など、とても楽しく、わかりやすい内容になっています。ぜひ、ご一読いただくことをおすすめします。（編集長記）

第1日目（8月31日、水曜日）

この日、朝9時に迎えに来たバンで、日加親善協会の副会長であるエアード・フラヴェルと一緒にバンクーバー国際空港まで出迎えに行きました。私がリーガル・サイズの用紙に「深川」という文字を掲げていたら、小林氏、坂本氏、荒井氏の3名は疲れと初めての海外旅行の緊張からか、慎重な面持ちで出てきました。後で酒を飲みながら言うには、あの「深川」という文字を見て、ほっとしたそうです。飛行機を降りるとすべてが英語だったので、心配だったようです。

でも、この話は3・4日あとになってから聞かされたことで、初めは彼ら職員の研修ということで、あまり内心は現さなかったものです。

到着が昼前だったということもありまして、昼食の心配をしたのですが、3人は時差ボケのせいか、食べてもいい食べなく

てもいいみたいな感じです。私が提案した八百半の見学の中で、素晴らしい考えが浮かびました。ここで弁当を買って、ホワイトロックのピースアーチ公園に行き、そこからゼロ・アベニューを歩いてアボ市に入ることです。

あの日は天気予報が外れていい天気でした。公園の中の国境線最も近いベンチで、寿司と幕の内の弁当、それに缶入りお茶で昼食を取りました。この方が混雑したフードコートや待たされるレストランより、なんぼかましだと思いました。それに煙草を吸う人間が4人もいましたから、青空のもとで、刈ったばかりの芝生の上で、とても気持ちの良いピクニックでした。もっとも男が6人では味気ないどころか、怪しまれているのではないかと緊張しました。そして国境線を越えてみました。サイレンやら銃声でも聞こえるかと思いましたが、何も起こりませんでした。

ああ、そうそう「空手キッド」で宮城さんが箸で八工を捕まえるシーンがあるでしょう。

エアードは柔術の先生なのですが、一度私がこの6フィートを越える男に、合気道の技を掛けたら「俺はこの技を30年間知りたと思ってたんだ」と私を尊敬したものです。（30年前レスリングをしていた彼は日本からの選手に手首を捕まれ、急にガクンと膝を曲げなければならない状態に落とされたのですが、自分で何故そうなったのか理解できなかったそうです。私がその技を復元したので、思わずそう叫んだという訳です）

その尊敬にまた、嫉妬があるのかもしれませんが。私たちの食べている所へ蜂がたくさん寄ってくるので、エアードが「修、それを箸で捕まえらるるか。それができたら俺、お前を本当に尊敬するよ」というものですから、私、食べ物に止まりそうな蜂の

いる辺りをパチパチやっていたら、運良くその間に挟まってくれました。「おい、見る、できたぞ」と言ったら、「どうやって捕まえたのか、見なかったから駄目だ」とか言ってましたが、その日の夕方の歓迎パーティーで、市長のいる前で「修は蜂を箸で捕まえることもできます」と兜を脱いだ格好でした。

昼間のゼロ・アベニューは警察の姿も麻薬闇取引の姿もなければ、退屈でした。ただある家の車道がカナダ側で家がアメリカかというのが、見物と言えば見物かもしれません。

3人を歓迎するパーティーは、市会議員の家の裏庭でテントを2つ張って行われました。これは去年の姉妹都市提携調印式に、深川へ行った代表団のリユニオンを兼ねて行われたものですから、市長、市会議員の他に市の有名人が集まったパーティーでした。こういう時、通訳って不便ですね。飲みたい酒が飲めないんですから。パーティーが終わりそうな頃、みんなテントの中に招かれ、そこでお偉方のスピーチをテーブルで3人に和訳し、そして立って坂本氏のスピーチを皆の前で英訳しました。「ゼロ・アベニューを通過して来たのですが、木の種類も畑も北海道とあまり変わらないので、外国に来たという感じが沸きません」という話だったと思います。

この後、私は荒井氏と一緒に、エアードの車で私営スポーツ施設のレストランに行き、アイスホッケーの練習試合を見ながら、ビールの飲み直しをしました。3人とも別々の理由で疲れ切っていました。充実した1日でしたが、明日が早いこともあって、10時半には家へ送ってもらいました。

第2日目(9月1日、水曜日)

私はお迎えの車で市役所に行き、そこで深川市役所研修職員3名と、アボ市の重鎮、今は総務部部長となっているトリッサ・ストロング女史と落ち合い、私を迎えたバンで、ジェームズ排水処理場へ向かった。私にとっても初めての訪問なのだが、それはいつも通っているグラドウィン・ロードの外れ、フレーザー側の堤防の脇にあった。

不思議に思ったのは、かなり近くに寄ってみるまで、下水の臭いがしないことだ。

昨日、飛行場からホワイトロックのピースアーチ公園へ向かう途中、ジャック・フレーザー橋の脇にある排水処理場を指し

て、エアードが、「去年の仕返しに、この見学をさせようと思ったけど、かわいそうだと思ってやめたんだ。修、和訳しろよ」と叫んだけれども、私は「まあいいよ、そんなこと言わなくても」と、私は通訳を拒否したものである。

深川での廃水処理場見学は、ある議員の申し出で計画されたとはいえ、代表団には人気なかった。「誰だ、こんな所の見学を希望したのは。X X, お前のせいだぞ。俺達がこんな臭い目にあうのは」なんて悪口が露骨に聞こえたものである。私は深川側の人たちがこの英語を理解するのではないかと、ハラハラしていたので、通訳を頼まれても拒否する覚悟でいた。こんな背景が分かっていたら、エアードの冗談で言う「復讐」も理解できないだろう、と思ったのが通訳拒否の理由である。

アボツフォードの排水処理場はミシオン市、チルワック市3市の共同事業である。第一処理で固形物を取り去り、第二処理で沈殿物と浮遊物を除き、第三処理でバクテリアを使ってる過し、さらに塩素を使って消毒し、最後は川へ放流するまえにその塩素を除き去る作業をしていたように思う。10年前までは、この見学を指導する市職員は、その水がいかにキレイかを示すため、見学者の前で実際に飲んで見せたそうだが、この日はそんなサーカスはなかった。

次の見学は、すぐ近くにある固形ゴミ処理場の中のリサイクル工場であるが、それまでに時間があるというので、5分程ブルーベリー畑の中を行ったところにある、クレイパンの煉瓦工場跡、そしてその村に寄ってみた。工場跡は、サッカーや野球ができる公園になっている。その公園の道を挟んだ向かいに博物館のような雑貨屋が立っているが、それはあいにく1週間前で閉店となっていた。それでも窓から覗いてみると、古風な洗濯板や、ソフトボール大のサッカー(鉛)などが見えた。

その店と並んで、煉瓦造りの家が数軒立っている。案内役のトリッサ女史に言わせると、BC州は湿気が多く、地震もあるので、煉瓦造りの家は不向きであることが分かり、工場は潰れたとの話。「BC州に地震があるんですか？」と深川の一行は驚いていたけれど、聞き返しててみれば北海道にもあるとのことだった。

リサイクル工場の敷地内には、他に段ボール処理場、芝生の草並びに庭木の堆肥処理場がある。私達の訪れたりリサイクル工場では、主に新聞紙の入れられた袋の処理が、その仕事である。バンクーバー近辺では籠が用いられているが、プラスチックの袋の方が幾つかの点で優れているそうである。安い、濡れない、取り扱いが簡単、持ち運びに便利等々がその理由。

この工場で働いている人たちの半数は精神障害を持つ人たちであり、処理された新聞紙、プラスチック・ボトル・キャン等を売ることによって利益をあげ、給料を払い、なおかつ施設拡張のための資金に当てているそうである。

日本ではリサイクルの技術がかなり進んでいて、深川側からのインプットがあるかと思っただけ、排水場同様、彼らからの比較は聞かれなかった。9月9日のお別れの際に荒井氏から頂いた深川市の「まちのようす - 市勢ハンドブック」の最新版には、去年(平成10年)には1人当たり1,032gのゴミを排出したと書かれているが、それがどのように処理されたかは、記されていない。

さて、汚いもののはこれですら十分だろう。私たちの昼食は、去年深川市代表団が見えて最後の昼食を取ったと同じところ、飛行場のレストランの一つ、スピッツファイヤー・グリルで、これから飛行場を案内してくれるカーチス・グラッド氏を交えて持たれた。

深川勢はカナダの料理はどこでも多すぎて食べきれないと言い、小さいサンドイッチのオーダーだった。後で「カナダの人は何処でも、たくさん食べて、精力的に働きますね」という印象を、繰り返し口にしていた。

広さとしては国際的に有名なエアショーが行われるくらいだから、アボ市の飛行場は国際空港となる可能性を十分持っている。今は一つの国内航空会社が入っているだけだが、既にもう一つの会社が入っているいい体制は整っていた。

この飛行場はまた、飛行機の売買中継地とも利用されている。カナダは税金が安いということもあって、アメリカの飛行機会社が機体をここまで飛ばして来て、例えば日本の買手がここで書類手続きを終え、機

体を飛ばして持って帰る、ということがなされるのだそうだ。

そして空港マネージャーであるカーチスさんの特別な計らいで、エドモントンへ向かう飛行機のすぐ後ろで、離陸の見学ができた。それから何と飛行場の滑走路を横断し、飛行場の拡張工事現場、さらに土地をブルーベリー農場に賃貸に出すところを見せてもらい、お別れとなった。

天候はますます回復してきているようで、陽射しは再び真夏並みである。もう一つの見学場所は、パロータウン・ポンプ場であった。これはスマス地区（アボ市の東部南部）の灌漑用水の調整場である。しかし、ここでも予約した時間まで間があるというので、トリッサ女史の家がある近所の丘にまで車で駆け上り、崖っぶちの住宅街から溪谷一帯を見下ろしてみた。昔このスマス地区一帯は大きな湖であった。いまは酪農を中心に球根農場その他が経営されているが、昔は煙草とホップの畑が多かったらしい。アボ市市長もこの地区に農場を持っている。（土地は貸している）

それから昔、湖の岸边に住んでいたというインディアン居留地の脇を通過して、このポンプ場に向かったのだが、予定した時間より早すぎたせいか、建物のドアを叩いても、何の応答もなかった。待たされている間、堤防を幾つか登って、3つの水面があることを確認した。

予定の時間にトラックでやって来たフランク・ライト氏が説明するには、一番高い水面はフレーザー川の水面、二番目の水面はこの付近の小河川の水面、そして三番目はスマス地区の用水路の水面であり、それは現在海面下1メートルに保たれているものである。

湖の水を汲み出し、埋め立てたのが1924年。第一次世界大戦で食料を戦場に送るため、農民が土地の拡大を求めたのがその始まりである。そして埋め立てによって広大な農場が開けた。書物によるとカナダ最大の埋め立て地という話である。そして1948年の大洪水の時でも、この地区は被害を被らなかった。立派なものである。

これで1日の研修日程をすべて終えた訳だが、それから研修者をそれぞれ宿泊する家に運ぶのが、もう一つ厄介な仕事であった。ビールが好きだという荒井氏は、ペ

リー市会議員兼副市長の家（しかし、ペリー代議士は飲まなかったという）、坂本氏は昨晚歓迎パーティーをしたギル議員宅。議員が仕事で不在だったので、一晩中片言の英語でジャグディッシュ夫人と写真を見ながら、家族の話をしたとか。

最後の小林氏はファスト議員宅に泊まる予定だったので、その家に連れていったところ、子供たちだけで、日本人が泊まる話などまったく聞いていないとか。幸いトリッサ女史が一緒だったので、議員と電話連絡がつき、議員の両親宅に泊めるのだと聞かされた。その晩、小林氏をバンクーバーへ連れて行って、野球見物をする予定だったが、ゲームが中止されたため、スタンレーパーク、そしてクイーン・エリザベス・パークへ連れて行ったそうだ。

第3日目（9月2日、木曜日）

私を毎朝ピックアップしてくれるソール・アンセイ二等兵は、カナダに入国して2年ほどしか経っていない。まだカナダ市民でないのにカナダ空軍の兵士である。母国のフィリピンでは排水ポンプの仕事をしていたそうで、その関係で日本の島根のポンプ会社へ2ヶ月ほど研修に行っていたようで、先日の排水ポンプ場、灌漑用水調整ポンプ場の見学では、かなり専門的なことを、私たちの邪魔にならないようにと気を使いながら尋ねていた。

英語の堪能な人で威張らない人だが、またユーモアのある人である。第1日目に私がエアードを深川研修職員に柔術の先生だと紹介したら、エアードが私をアンセイ氏に向かって「俺は柔術をするし、修は柔道をするんだ」と言ったら、彼はすかさず「俺は任天堂をする」とのたまうた。「柔道」のドウにからめて「任天堂」とは、何と転機の利く頭かと皆で大笑いした。そしてピースアーチ・パークからの帰りがけ、みんなでパンに向かって歩いている時、エアードが芝生で前方回転をして、私の箸で蜂を捕らえたことに対抗して見せた。当然、皆の目がアンセイ氏に向いた。「こんどは任天堂の番だ、任天堂やってみろ」と、茶目っ気なエアードが叫んだ。すると、アンセイ氏はテレビもゲームマシンもない所で何もできる訳はないのだが、親指だけを盛んに動かして「パン、パキューン、パン、パン、パン」とマネしだしたものである。

そのアンセイ氏が朝7時40分に私を迎えに来た。サレーの家から来るのであるから大変である。小林氏・荒井氏・坂本氏の順にピックアップすると、私達はマツク

イ・レクリエーション・センターへ向かった。ここは水泳プールを主体とした建物で、アイススケート場もあるが、建てられたのはアイスリンクが先である。四角でなくある種の変形で、一方の端はフロア・レベルだから車椅子でも入水できるようになっている。プールの様々なプログラムに関して、企画課の荒井氏は、深川市が現在水泳プールの建造計画を進めている関係から、ことさら興味を持って視察されていたようだ。

それからケン・イェーツ氏の車でロータリ・スタジアムを覗き、その中の一角でトランプ遊びに興じているインド系の人たちと公園係との奇妙な関わり合いの話を聞いた。今、市ではインド系の人たちが市内の公園のベンチを占有しすぎるという理由で暴力沙汰を起こした白人の裁判が行われている。このスタジアムでは昔、インド系の人々が公園側に「自分たちが雨の日でもトランプ遊びができるように、東屋を建ててくれないか」と申し出た。

そこで、インド系の人たちの必要を特別考慮した公園側は、屋根付きの建物を、スタジアムの観客席と反対の位置に建て、その費用を折半したというのである。

それから、ツイスタージムという池田親子が運営、試合に活躍している建物を覗いてみた。池田貢氏は日本を、その息子のリチャードはカナダを代表したオリンピック選手である。しかも、リチャードはまだ現役で活躍している。貢氏も日加親善協会の創立に一役買っていたが、何しろ試合が多く、夕方はいつもクラス指導に当たっているため、私達の月例会合にはほとんど来られない。

それから、坂を上ってアグレック・センターという、真夏に農産物品評会の開かれる建物を外から見学した。中に入っても、ただっ広いだけで何も見るものがないからである。

今年は、深川から1トンの米が入る米袋を送ってもらって、それにアボ市役所が産出する書類の裁断ゴミを詰め、この農産物品評会で市の姉妹都市を宣伝したものだ。

また、サッカーや野球場の隣り合わせになっている場所で、ロデオが行われる場所、BMバイクのレースが行われる場所の説明も聞かされた。これらは皆、市民からのインプットがあって作られたもので、その点、役所が中心になって計画を進める日本と根本的な差があるようである。

スタジアムのある所が窪地になっているのは、昔ここから砂を運び出したからである。

そして、その後アグレック・センターのある一帯は、しばらく市の塵芥場として使用されたものである。それを埋め立ててもカモメがやって来て掘り出すものだから、近所の住民の苦情が絶えなかったのだが、芝生を敷いたところ、その問題は解決した。しかし、まだメタンガスが発生しているようで、それを集めて燃料として使い、アグレック・センターを暖め、灯すエネルギー源に使用している。という訳で、センターの駐車場の大半は、まだ舗装されないままに残されている。地盤がまだ固定しないからだ。

イエーツ氏が「もう一つ、この駐車場の入り口付近に鉄製のポールでできたゲートがあるのは、ここが高圧線の真下に当たるため、あのゲートを通できない車がここで駐車した場合、高圧線の電流のショックを受ける危険がありますよ、という警告なのです」という。市の公園課は、住宅建設が許されないこの高圧線下を利用して、ハイキングのできる公園や、テニス・野外ラクロスなどができる施設を、あちこちに作っている。

アボ市にはマクミラン・プールというもう一つの水泳プールがあって、この施設の場合はプールが先にでき、アイスリンクが後で付け加えられた。アイスリンクはほぼ1年中使用できる。その脇にある小さなスケートリンクで、真冬だというのに、氷の上に粉雪を降らせる装置を2分間ほどやって見せてくれた。私にとっては、もうすぐクリスマスだと思うと、ぞっとさせられる装置である。

ホッケーの審判員が使用するというロッカーの見学。限りなく汗臭い。それから今は改装中で水を抜いたプール。元々競泳用に作られたものだから、四角い25メートルのプールである。それでも様々な人たちに使用してもらうようにと、可動式の階段、可動式のバスケットボールの網、夜空の星を眺めながら入浴できる窓天井のついたホットバスなどが備えてあった。

それから私達は、イエーツ氏の車で市役所に送られた。そして財務部の見学を始めた所で、重鎮トレッサ女史が迎えに来た。市長に会う時間ができたので5階へ至急来るように、というのだ。先日、深川市研修

者が、深川の河野市長からファーガソン市長に渡すよう預かったものがあるので、時間を作ってこないだろうか、と申し出ていたのだった。

招かれて小さな市長室へ入って行くと、市長は窓の外を眺め、天気の話 시작했다。それから振り向くと、日本からの代表者が、深川市長からの扇とその衝立てをプレゼントした。アボ市市長も良く来られたとの印にプレゼントを返し、来年の訪問を歓迎する旨を伝えた。荒井氏はそのことに関し、「よろしく願います」程度の挨拶を返したかったのだが、ご自分の立場のことを考え、言いそびれていたようである。

それから土木部の見学であった。アボ市の市役所職員が市の大きさに比べ、余りにも少ないので、深川職員は驚いている。もう一つは女性職員の数だけでなく、トレッサ女史をはじめ女性が様々な要職についていることである。研修者の一人が「深川もそうなりといひんですけど」と言うと、もう一人が「でも実際できないだろうし、できたら困ると思うよ」とか本音を吐いていた。アボ市に職員の数が少ないのは、コンピューターの大幅な導入によるものらしい。

昼食は、市役所の一階にある韓国系の人経営する食堂で行われた。私がとった巻寿司は少なくとも2日は経っているらしく、飯粒が不透明に乾燥していた。この昼食にはトレッサ女史と、午後から案内役を務めるロベルタ女史、そして、最近自分の祖母が横浜生まれの日本人だと分かったリチャード・ダンジガー氏が加わった。リチャードは、午後に都市計画についての説明をする予定である。私と去年の5月、深川訪問団との最後の昼食会が開かれた飛行場のレストランで会ったが、初対面の私に「自分も4分の1は日本人の血が流れている」と言って、祖父母が上海にいたことを話すなど、全く自然体で親しみやすい人だ。

午後の視察は、市役所の建物を出て、徒歩で歩ける距離にある警察署と消防署であった。

深川からの研修者には、外で煙草が喫えらるって、しかも天気は申し分ないし、快適な運動であったらう。

アボ市警察署の見学は緊張させられた。犯罪歴データを処理保管する部屋は、これから本格的なコンピュータ化が始まるというので、少しゴタついていた。911の部

屋は、神経を尖らせる部屋だった。しかし面白いことに、ここはカナダの警察署では珍しく天井窓があって、雰囲気了幾分か和らげていた。「あ、今1人の警官が現場へ行きました」と副署長のイーエン・マクドナルド氏が小声で話すと、視察団の緊張感が走った。

被害者支援のサービスは、主にボランティアの協力で頼っていたようだ。

次に、ウエイト・トレーニングの部屋を通して訪れたのが、いわゆる「豚箱」である。逮捕された容疑者を車から連れ出し、顔写真を撮り、書類記入を終えて、セルへ入れる訳だが、個人用のセル、団体用のセルを見せてもらった。簡素というより、冷たい非人間的な感じのする部屋である。そして高い天井近くにビデオカメラがあって、警官の行動を主に録画し、後々の弁護のために使うのだそう。それから私服刑事の部屋、そして3交代で働く警官の部屋、バイク自転車隊の部屋、会議室、最後にイーエンさん自身のパトカーの内部を見せてもらった。

その次は、すぐ隣にある中央消防署である。フルタイムの消防員を常置するのはこのこと、もう一つの市中心部にある消防署だけ。その他の5つの消防署は、ボランティアという名前でパートタイムに雇われている消防団員によって運営されている。

年間1,000件以上発生する火災のほとんど(70%)は被害総額が1,000ドル以下の小さいものである。それだけ消化活動が迅速だと言えばそう言えるのだが、深川の火災発生件数が去年(平成10年)でたったの16件と聞いて、消防署長は呆れたという顔をしていた。

署長は、火災に対する市民の態度にも文化の差があり、カナダではただ不運だった程度の反省しかないが、日本では市と近所に迷惑を掛けたということで罪の意識を感じる。

カナダでも、もう少し周りへの気を使ってほしいものだ、と述懐していた。

そして私達は外に連れ出され、梯子車で、ビルの10階に相当する30メートルの高さにまで押し上げられ、市内360度を見下ろした。何やら得体のしれないボールの油圧機で押し上げられるのだから、下を見たら本当にめまいがする。火災の際に、この梯子を上り下りすることを考えると、息切れ

さえ感じた。市の中心にあるミル・レイクが見えたりして眺めは素晴らしものの、梯子車に押し上げられるのは、決して居心地の良いものではない。

市役所に戻ると先程のリチャード・ダンジガー氏の部屋へ通された。農耕地は州政府の管理、ハイウエーやインディアン居留地は連邦政府の管理ということで、都市計画の面積はかなり限定されている。市の予算も限定されている。したがって、土地開発会社に土木工事・舗装の費用を一部負担してもらい、などの形で開発を進めるのだそうである。説明は様々な地図を用いて、詳細に説明された。

それが終わると、アンセイ氏が市役所の外で私達を迎え、市内最大のショッピングセンター、セブンオクスまで連れて行ってくれた。アンセイ氏は今朝、私達をマツクイ・レクリエーション・センターで降ろすと、すぐにサレーの自宅に帰り、幼い子供たちを連れて、バンクーバーPNE夏祭りに連れて行ったとのこと。それからまた、とんぼ帰りでアボ市に戻ってきたのである。私が一緒に買い物食事を、と誘っても昼寝したいらしく別れて行った。

しかし、私が薬局で切手を買っている間、深川からの研修員3人は、ふと何処かへ消えてしまった。私がモールの中を探しまわっていると、トイレを探しているという3人を見つけたので、やっと安心できた。「トイレはトイレと書いてないからね」と言われ、それもそうだと同情したものである。

3人は日本色に飢えていた。フードコートで握り巻寿司の弁当を頼むと、日本茶に舌つつみを打った。韓国系のウェイターが何度もお茶のお代わりをしてくれた。私も、これは昼間の乾燥した巻寿司の口直しになった。

それから買い物の必要がないという3人を、暇つぶしにスーパーマーケットへ連れて行き、品物の比較をさせた。すべてが安い。そして、アンセイ氏が今晚で最後となるということで、カードを買ってみなでメッセージを書いた。

モールを出るとアンセイ氏が車を駐車させた所だった。その車で私達はトリッサ女史の家へ向かった。スマスマウンテンの崖から、スマス・プレイリーを見下ろす家。

落日を前にした眺めは素晴らしかった。「それでトリッサ、この家から毎日、市長を見下ろしている訳だけれども、その市長の農場ってのは何処にあるんだい？」と私がかからかい半分に尋ねたら、「この平地のずっと外れ、山の麓の所にあるのよ」と見下ろすなんてとんでもないと言いたげな口調であった。

トリッサ女史はさすがに重鎮である。彼女の鶴一声で、今日私達が視察でお会いした消防署長、飛行場マネージャー、警察署長、市役所土木部部長などが次々と現れた。言葉の違いから2つのグループに分かれてしまったものの、私達は消防署の署長と先ほどの情報交換の続きを行った。消防署は自分の担当区域を守ればそれでいいというのではなく、大火災の場合は他の町へ応援に駆けつけることもあること。日本の消防トラックは素晴らしいこと、云々。

他のお客が帰りはじめ、私達もお暇する番になって、玄関を出たところで、荒井氏が私に「これでトリッサさんとお別れするんですね」と尋ねて来た。「そうです」と言うと、彼は一段高い所に立っているトリッサ女史に向かって、「大変お世話になりました。おかげで市役所について有意義な研修をさせて頂きました。また来年、深川からの代表団が公式訪問をする予定でありますので、何とぞよろしくお願ひいたします」と述べ、私が通訳すると、トリッサ女史も、「いつでも歓迎しますから、気兼ねなくどうぞいらして下さい」と答えた。とっさのスピーチにしては素晴らしい内容だった。

深川研修者の3人は昨夜泊まった人々の所へと送られ、次の日の朝、グレイハウンドバスの停留所で落ち合うことにした。というのも、元来の計画では、「労働の日」終末の連休に中休みを取って、バンクーバー、ビクトリア、ウイスラーへの旅を計画している3人に、ウエストコースト・エクスプレスという通勤用鉄道を使ってバンクーバーのホテルへ移動してもらう予定であった。ところが、それがミッションの駅を朝の5時ごろ出発すると分かった時、それではかわいそうだということで、バスに変えたのである。しかしバスで行っても、その終点からホテルまでタクシーを使わなければならない。明日は特に計画はないという彼らに、私が今朝、「私でよければバンクーバーまで送って、市内見物も手伝

いましょう」と申し出、そうすることになったのである。これをトリッサ女史に話したところ、「既にホームステイ先の家族へは、明日の朝9時半にグレイハウンドバスの停留所へ連れて来るよう連絡を取っているの、変更したという連絡をするなら、混乱させるばかりだ。修、自分でやってくれ」というのである。私も彼らを混乱させるよりは、グレイハウンドバスの停留所で落ち合って、そこで説明した方が簡単と思い、この晩は変更を口にしないまま別れた。

坂本氏がアンセイ氏とのお別れにカードを渡したのだが、私が「みんな日本語で書いてあるから」と警告すると、アンセイ氏は私との別れ際、「これからはもっと日本語の勉強をするけど、分からなくなったら尋ねるから」という具合の軽快な別れ方をして行ったのである。

第4日目(9月3日、金曜日)

今日はエスコートのバンがない。私の車でグレイハウンドのバス・デポに向いながら、あのバンにさえ入れるのに苦労した3人のラゲージを、このセダンにどうやって入れようか、入らなかったらどうしようかと心配した。

今日もまた良い天気で、9時10分に荒井氏を乗せたシルビア・ペリー夫人が到着し、5分程して小林氏を乗せたエド・ファスト・セニアが到着した。坂本氏を乗せたモー・ギル議員の車も9時半に到着した。記念写真の前に、私が「実はギルさんが助言されたように、今日は研修者の皆さんを農場に連れて行きたいので、予定を変更して、グレイハウンドは使わず、私の車で私が彼らをバンクーバーまで連れて行きます。途中、フォート・ラングレーの博物館に寄るつもりです」とエスコートの3人に話したら、「それは良いアイデア」というので、幸い何の批判めいた反応はなかった。

次の心配は荷物である。幸いラゲージ2つはトランクに入り、もう1つは後座席の2人の間に入れて、2人が何とか座れる程だった。助かった。

やれやれというところで、記念の撮影会。それが終わっても農場見学へはすぐ向かわず、幾つかの用事を市内で済ませなければならなかった。まず小林氏がロンドン・ドラッグズでカメラの買い物。それから金銭係の荒井氏の要請で、ロイヤルバンクで円をドルに両替。さらに、ブルージェーのガソリン給油所で車を満タンにする。ここ

で既に 10 時 20 分であった。

農場見学と公言はしてみたものの、私はどの農場とも予約を取ってはいない。見学させてくれるかが心配だけれども、やってみるしかなかった。はじめはダウンス・ロードにある加藤ナーサリーという、苗木の卸し売りをする農場である。私は牧師をしていた頃、この家で教会の家庭集会をよく開いたことがあるので、経営者のジョージやサラを知っている。それに今でも日系人の葬式がある度に、彼らとは時々顔を合わせている。

事務所に入っていくとサラが出てきて、農場見学をお願いしたら、案内人をつけようかと言ってくれる程、気安く承諾してくれた。サラは日系人二世で日本語が話せない。深川の 3 人は、日本人の顔をしているサラと英語を話す奇妙さを感じているのか、ことさら無口になったようだ。「水で泥んこの所もあるから、気をつけて」というサラの言葉を背に聞きながら、私達は足早に事務所を出た。

外は見渡す限り、商品の苗木が元気に成長していた。名前の分かるものもある。もみじや藤などもある。ひととおり一角を見終わった所で時間節約のため、引き上げることにした。というのも、コークイットラムの日本食品店「藤屋」で家庭料理の弁当を食べたいのだが、その前にフォート・ラングレーの博物館に寄るとすれば、あまり時間はなかったからである。おまけに、その途中でまだ見学したい農場があるのだ。

それから仏教会のお寺を見せるつもりで、市川夫妻が経営していた水仙農場の前を通った。「今、この農場は水仙を作っておらず、畑は他人に貸しています。市川夫妻は亡くなり空き家になっていて、畑の向こうに住む娘さんのジョーン園田が、家の面倒を見ている。市川夫妻の葬式も、市川夫人の弟さんの葬式も、そしてジョーンのご主人の葬式も私がしました」と話しながら、家の前を通り過ぎようとした時、60 才に達したとはみえないジョーンが、トラクターに乗って、前庭の草刈りをしている姿が見えた。

車を乗り入れると、ジョーンは仕事の手を休め、5 分ほどでこの農園の歴史を語ってくれた。自由移動先のリルエットから帰った市川家は、はじめはルーバークとか苺などの野菜を作ったのだが、球根栽培の事

業に掛けて、それが上手く当たったのである。ところが様々な条件が重なって、事業はその後継続しなかった。

フレーザーバレー仏教会の建物は、市川家から約 1 分程行った同じ通りにあった。深川の 3 人は、京都・奈良で見えるお寺とは全く異質で、普通の民家にしか見えないこの建物に、むしろ北海道開拓時代のお寺を想像したのか、興味深く観察し、写真を撮っていた。

さて、時は 11 時半。もう農場を見たり、博物館に行ったりするには、コークイットラムでの日本料理の昼食は無理のようだ。博物館の見学の前にフォートラングレーの町でサンドイッチでもばくつきましようかと聞いてみると、少し遅れてでも日本料理が食べたい、というのが全員一致の意見。それで決まった。少しは強行軍でも、予定通りスケジュールをこなすことにした。

56 アベニューにある井上ファームは、日本の野菜を育てては、「藤屋」のような日本食品店に収めている。私たちが農園の建物に向かうと、息子さんのケネスが外で、耕耘機の修理をしていた。彼のお父さんの葬式も私が担当した。退役軍人のケネスは相変わらずぶっきらぼうな返事だったので、長話はせず、母上の井上夫人の仕事する畑へ 3 人を連れていった。

井上夫人は私達の姿を見ても、あまり驚いた様子もなく、九州の姪がカナダに来て、しばらくここで生活したいというのだが、そのことを親に話したら知らない、聞いていないとか、それでどうのこうのと、今悩んでいる話を私に日本語でしゃべりまくった。今でも私を牧師だと思っているらしい。井上夫人も二世だが、ご主人が一世だったこともあって、日本語がかなりできる。そうこう話しているうちにケネスもやって来たので、ようやく深川市からの 3 人がアボ市の市政研修に来ている説明を行った。そして 2 人を畑に残し、時間が余りないこともあって、私達だけで畑をぐるりと周り、農場を出た。

それから、岡崎・木村両氏が経営するマッシュルーム農場を見学したいと思ったが、無理であった。昼食時であり、雑菌を運ぶ部外者は入れないというルールがあるため、私も 4 年間、岡崎氏の所属する教会の牧師でありながら、1 回しか見学していない。それでも誰か親切な従業員が見せ

てくれるのではと思いつつ、事務所のある一角に首を突っ込んで声を掛けてみたが、ついぞ返事はなかった。洞窟のような状況の暗さと匂いを垣間観察して、満足することにした。

時計は 12 時を回った。しかし日本料理への執念は変わらない。「博物館を見学し、フェリーに乗って対岸のローヒード・ハイウエーを使ってコークイットラムに行くとすると、2 時か 3 時ですよ」と言っても、「我慢できます」との一点張りである。

博物館は、かつて B C 州の首都であったフォートラングレーの砦を、そのまま再現したものである。太い丸太を並べた城壁の中は、かじ屋、雑貨屋、大工桶屋、毛皮商に携わる通訳や商人の寝室、砂金掘りの施設、広い会議室を上につつ総督副総督の部屋、その他展示用の建物があった。最後にインディアンと物々交換の場であったハドソン・ベイ交易会社の展示室では、太ったおばさんの解説者が、特別に私達だけに北アメリカと日本の古い初期の頃の繋がりを説明してくれた。ラノルド・マクドナルドなる男が捕鯨船の遭難を装い、開国以前の日本に侵入。幸い開国の気運が高まっていた頃で英語を習いたさに、斬首されなかったとのこと。しばらくそこで英語を教え、日本語を習ったけれども、終いには江戸へ送られた。しかもスパイ行為をさせないようにと、籠の窓を開けることは許されなかったという。

運良くペリーが浦賀に来た頃で、ペリーの船でアメリカへ帰った、という話なのである。

深川の 3 人に通訳して聞かせたが、聞いたことがないとのこと。「日本で知られていることが調べてみる。ありがとう」と述べて、ほぼ 2 時間に渡る見学を終えた。

フェリーは 9 月とはいえ連休の始まりだから、渡し舟を待つ長い車の列ができていた。私はただ車の中で待つのも退屈だろうから、3 人に歩いて突堤の先で景色を眺めたらいい、と進めた。2・3 回フェリーを見送っただろうか。思ったほど長くはなかった。船上で車を降りて、3 人のいる船先まで行ってみると、今晚の夕食の話になった。「こんなに遅くなったのでは市内観光はしない(?) ことにして、ホテルでまず荷物を降ろし、バンクーバーでの夕食は、グランビル・アイランドで 10 割の割引をするという所で」と私が言うと「10 割の割引?」と 3 人は目を丸くした。「いや、10

パーセントの割引。頭が疲れるといつも数字の間違いをして」と、私は泥臭いフレーザー川に川鳥の群れを眺めながら、弁解した。

時計は 2 時半を過ぎていた。ローヒード・ハイウエーの反対車線は、連休のため山間部や内陸部へ向かう人たちの車でノロノロ運転であった。ポート・コークートラムの付近は動かなくなった長蛇の列が、数キロも続いていた。行き先の方向が違ってラッキーだとは思いますが、「藤屋」に入った時は何と 3 時半。みんな鯖の塩焼きを注文し、私だけがご飯のエキストラを注文した。まこと待ちに待った日本の家庭料理である。煮物、漬物、サラダ、それにお茶。私達はみな料理を目にして涙が出そうになったが、口の方は何を出すのも惜しいとばかり、ぱくぱく食い出した。待った甲斐があった。坂本氏は新婚旅行で毎朝朝食を頼んだところ、お嫁さんに叱られたとか。私たちがアボ市の代表団が去年深川へ行った時、多くの白人が和風朝食を食べていたのだけれども、私が彼らの食べているものが何か説明したら、ほとんどの人が和食をやめてしまった、とか。そしたら荒井氏が「味噌汁ないんだろうか」と言い出すと、「味噌汁飲みたいねえ」と小林氏も同調。結局インスタントの味噌汁を買って、3 人は飯が終わってから、感慨深げに啜っていた。

これから、6 時に閉まるというグランビル・アイランドの市場へ駆け込めるか、時間との競争である。腹が膨れて眠いなどとは、言っていられない。ローヒードからブロードウエーに入って、メイン、そしてヘイスティング、それから彼らの予約があるパンパシフィック・ホテルまでドライブした。私もアイカスという日本語テレビ放送の事務所に用があるので、ホテルの玄関前で 45 分後に会おうと言って、私は 3 人をいったんホテル前で降ろし、車を近くの少し安い駐車場へ入れた。45 分というのは、駐車を 1 時間以内に食い止めたかったからである。

アイカスの堀田直人さんが先々日、私に電話を下さったのだが、何しろこの通訳の仕事が忙しく、うまく会話できないままだった。5 時を回っていたので、あるいは事務所は閉まっているかとは思ったが、幸い開いていた。そればかりが待ってましたとばかり、用件は二言で通じてしまった。「先日のインタビューのビデオをコピー

しておきましたので、それを差し上げたくて」というのである。しかも、直接顔を出したおかげで、用件が一気に片付いたという訳である。

ところが深川の 3 人は、45 分たっても階下へ降りて来なかった。6 時 10 分前、市場の見学は絶望的だ。2・3 分遅れて降りてきた彼らは、深川へ電話かけようと試みたのだが、どうしても通じないと言い訳。とにかく駐車が 1 時間以内で済み、ガランとした繁華街を抜け、私たちはグランビル・アイランドのレストランの駐車場に車を停めた。

それから腹ごしらえの意味で散歩をし、サイバー茶会の月例会が開かれるグランビル・アイランド・コーヒーハウスに入った。「あれ、1 日違うじゃないですか。サイバー茶会の会合は昨日でしたよ」、私の顔を見るや店主の山口たかしさんがそんな挨拶をした。見ると最近生まれたという赤ちゃんが胸にあり、長女の娘さんがテーブルで絵を書いている。私は深川からの 3 人を紹介し、「通訳で昨晚は来られなかったのだけれど、昨晚の二次会の開かれた所でこの 3 人と祝宴を張ろうという魂胆です」ということを伝えた。そして奥様のメグが煎れたコーヒーを持って、外のテーブルに座り、3 人に深川からの電子メールを披露した。この研修の裏方で、準備をした小滝教授からのメールである。

煙草吸いの 3 人には、外で座るしかないのだが、私も散歩する人々の話し声、楽器演奏の音、そして入り江から上って来る涼しさに、何かはじめて寛ぎを得たという感じがした。それから散歩を続けているうちに、外の公衆電話を見つけたので、坂本氏はもう一度深川への電話を試みた。そして難なく通じた。病院にいるはずの義理の両親との話で、退院して帰宅したばかりだと知らされたのである。それなら私も、ということで荒井氏も試みた。荒井氏は国際電話なのに息子さんに、テレビゲームのソフトをどこに置いたのかと聞かれたらしく、そのあまりにも日常的な会話に、むしろショックを受けたという顔であった。小林氏も通じたには通じたのだが、あいにく奥様は留守で、東京の娘さんに元気でいることを伝えた。

ロイヤル・オーシャンの日本料理店では、ご飯を注文したのは私だけで、3 人は研修の中休みとはいえ、祝宴気分飲みかつ食べた。私はこの後、アボ市まで運転して帰

らなければならないという理由で、飲むのを控えた。しかし「もっと気楽に飲みましょうよ。笠原さん、今晚は私達の部屋で泊まっていて下さい。もし差し支えなければ、の話ですけど」と誘われ、「でも、これからホテルまで運転しなければならないから」と言うと、「じゃあ、ホテルの近くに場所を変えて、飲みましょう」というのだ。時は 11 時近かった。もうどこのレストランも閉まっている。バンクーバーでは行きつけの店がないので、3 人を案内する気分になれない。

ホテルの近くで駐車し、ホテルへ帰ってみると、そこのバーは小さくて寛げる雰囲気ではなかった。小林氏はロビーの電話から家へもう一度電話を入れ、ついに奥様とお話できたらしい。部屋に入ると、3 人は自動販売機が 8 階にあったから、そこでビールが買えると言い出した。私がカナダでは、酒類は自動販売機では買えないと言っても、聞こえないらしく、その 2 人が小銭を集めて降りていった。その間私達は、ホテル・スイートのミニ・バーにあったビールやワインを飲みだした。

飲み直し会は、研修が半分しか終わっていないのに、その反省会のような雰囲気だった。英語のできないことの辛さ。そして片言でも通じた時の嬉しさ。これからもっと英語を勉強するという決意。もう一度家族と来るとしても、これほど慌てることはないだろう、という自信。そして泊めてもらった人々の宗教心と親切に触れ、観光旅行では得難い経験をしたことなど。荒井氏が眠り始めた 3 時頃には、哲学宗教の話であった。神が存在するとかしないとか、死への心の準備とか。私も聞き役に回って目を覚ましていたが、明日 9 時にバンクーバー市内の観光ツアーがあるというので、ついに 4 時「眠りましょう」という宣言を行った。

翌朝、8 時に起きて、味噌汁の朝食が食べたいという 3 人とホテルの向いにある「柿之門」へ連れていったが、シーズンオフのためか閉まっていた。ホテル内の日本料理店「岬」でもやっていなかったそうである。8 時 40 分に 3 人と別れ、夜通し停めても駐車料がたった 1 ドルという嬉しい料金を払って、バンクーバーを去った。私がアボ市内の自宅に着いたのは 9 時 50 分であった。

第 8 日目 (9 月 7 日、火曜日)

今日からパンの運転をしてくれるグラ

ハム・テイラー氏の話では、バンクーバーのダウンタウンまで1時間半の余裕をみる必要がある、とのこと。それでグラハムは、私を5時45分に迎えに来た。まだ薄暗かった。これから深川からの3人をパンパシフィック・ホテルでピックアップし、アボ市に連れて来るのである。

国道1号線は朝の6時だというのに、昼間並みの混雑である。しかし、3人を連れて戻った7時半ごろ、バンクーバーへ向かうサレー付近の車線は、数マイルに渡って数珠つなぎのノロノロ運転であった。あんな混雑の中を毎朝アボ市付近から通勤する人がいると思うと、気の毒になった。

グラハムは市役所の(機具)管理維持企画の担当者である。大学生の息子が2人いる。その1人が飛行機のパイロットになる訓練中で、今日単独飛行でピクトリア市へ向かうのだそうだ。無事に飛べることを祈りながら、彼は空模様を心配していた。幸い週末は崩れていた天気も回復して来ているようである。

グラハムの計算は当たっていた。7時10分にホテルに到着し、私が入り口へ駆け込んだら、ホテルの部屋へ駆け上がるまでもなく、坂本、小林、荒井の3名は入り口近くの椅子に座って、私達の到着を待っていた。ラゲージも既に、ポーターの台車に乗せられていた。グラハムを3人に紹介し、荷物をバンの後ろに積むと、出発の準備完了、バンはあっという間に、アボ市に向かってUターンした。

「週末の観光旅行はどうでしたか」と車内の3人に尋ねると、ピクトリアは雨で、特にブッシュアート・ガーデンは押すな押すなの人込みで、じっくり見る暇もなく、外に押し出されたとか。ウイスラーへ行く途中運転していたツアーガイドが、話に夢中になってスピードを出しすぎているのも気づかず、警察に捕まって、スピード違反のチケットをもらったとか。ウイスラーの頂上は寒く、雪がちらついていたとか。ホテルではお湯が手に入らないので、味噌汁が飲めなかったけど、每晚向かいの「柿之門」に通ったとか。私の車があれば、もっと有意義な時間が過ごせたのではないかと、思わないでもなかった。

「ところで皆さん、朝食はまだなんでしょう?」と私が尋ねると、荒井氏が「できたらどこかで、ハンバーガーでも買えないでしょうか」と言う。グラハムに尋ねたら、

アボ市到着の時間が予定より早いようだから、マーシャル・ロードのABCレストランに行こう、と行ってくれた。しかし、レストランに私達4人を降ろしたグラハムは、45分後に迎えに来るからと言い残して、オフィスへ出向いて行った。

ところが、注文の食事が待てども出でず、心配したグラハムがレストランに入ってきた時は、私達はまだ食事の最中であった。「これから訪問するコミュニティー・センターは時間はたっぷりあるから、急がなくてもいいと言ってくれている」と伝えに来たのだ。携帯電話で便利になったし、またそれを使う者も親切だ、と思った。

アボツフォード・コミュニティー・センターで私達と荷物を降ろすと、グラハムの今日の任務は終了した。ということは、私は独自で帰りのつてを探さなければならぬのだ。3名の研修者はここでホームステイ先の家族に出迎えられるからだ。

入り口のデスクで、理事長のウォルター・ベックカウ氏に会い、荷物を預けて、すぐに今日の全日程の案内役、フラン・マクドゥーガル女史に紹介された。彼女は資源開発のマネージャーである。

はじめの視察は隣の建物で、元刑務所、警察署であった場所である。その地下のチャイルド・ケア・リソースの部屋で、ビデオを見せてもらい、アボツフォード・コミュニティー・センター全体の仕組みと機能を説明してもらった。それからリーガル・エイドという司法扶助の制度の説明。次いで1階で精神障害者のデイケアの部屋を見せてもらった。彼らは、ミールズ・オン・ウィールズという、買い物や料理のできない高齢者に、食事を運ぶ仕事をするのだと言う。しかしその時は、もう1つの野外活動で彼らは出かけており、留守だった。

ユース・サービスは問題児と保護者とのカウンセリング・サービスであり、かなりの効果をあげているようだった。他用で出掛けていたチャイルド・ケア・リソースの担当者が戻ったので、その説明を聞いた。ただのデイケアというのではなく、移民や新しくカナダの他の地区から転入して来た家族へのサービス、犯罪の被害者側家族への立ち直りのための助力が、その主な仕事であった。

その次はフランの車で2分程離れた所

に位置するフード・バンクを訪れた。このような施設は日本にはない。日本では貧しい人には、政府がお金の援助をするのだが、カナダでは、それが個人を自立させるどころか、むしろますます援助への依存と、麻薬への依存を助長するといっているので、行われていない。しかし怠け者が無料で食べるとい一般の偏見に反して、とても厳しい検査と自立へのプログラムが組まれており、アボ市に住む私にも教えられることの多いサービスである。

フードバンクでコーヒーとケーキを出されたのに、元刑務所の建物へ戻ったら、昼食会であった。これは、アボツフォード・コミュニティー・センターの理事会の人達との食事であり、弁護士あり、事業家あり、オランダ系、韓国系の人々を交えた、おいしいパスタでの昼食会であった。だが、皆で向かい合って座ったテーブルが細長く、私とその真ん中に座っても、荒井・小林両氏の側の会話は通訳できても、坂本氏の通訳はおろそかになりがちであった。こういう時は、通訳というのは飲む食べるの暇はないものである。

それから一番始めの建物に戻り、その2階に上がってファミリー・サービスの説明を聞いた。これが日本に社会福祉の仕事に、一番近いだろう。暑い日差しを受けた屋外のテーブルで行われた説明会であったが、双方が情報を交換する場面が幾つかあった。「フード・バンクが無いなら私達を呼んで下さい。その設立のために私達、喜んで日本へ行きますから。」彼女らは日本を視察したいというレベルを超えて、使節団か宣教師団の意気込みである。実際この説明者の中には、深川で看護婦助手として数ヶ月を過ごした女性もいた。

それから室内に入って聞かされた多様文化並びに移民サービスは、複数文化の人間が住むカナダとそうでない日本との違いはあったが、英国系文化でない文化からの人々への繊細な配慮という面で、深川からの研修者は感銘していたようだ。

それから連邦政府の職業安定所と別に設けられた就職相談所では、コンピューター操作による仕事の見つけ方のデモ、新しく事業を始めるものへの技術的・財政的援助、さらに障害者を雇用する企業への援助などの説明があった。

最後のセニア・サービスでは開口一番、

「私達の主な仕事は、電話での長い長い応対です」と言われた。話し相手のない高齢者が多いのだという。でも、まだ心身ともに元気な高齢者へはボランティアの仕事を探し、意義ある余生が送られるようあらゆる企画を立てるそうである。

これで今日の日程を全部こなしただけだが、最後に私たちは理事長のウォルター・ペットカウ氏の部屋に通され、まだ質問が残っているかどうか尋ねられた。既にファミリー・サービスの所で舌が回らなくなったのに気付いていた私は、質問がないと聞いて、ホッとしたものである。だらしのない通訳だ。

今晚の宿泊は、ペットカウ氏が坂本氏と小林氏の2人を引き受け、荒井氏は日系人三世で豊田自動車代理店の社長宅、ブライアンハケ城氏に引き取られるという。それで、その奥様のポーラが娘さん2人と迎えに来ていた。ポーラは混血だけれど、お父さんは二世である。私の近くに住むというので、ライドを頼むと、快く承諾してくれた。

この晩、近くの柔道場で、フレーザー・バレー日加親善協会役員の会合が開かれた。出席者は会長のジョージ・タフ、副会長のエアード・フラベール、会計のエド・ブライス、そしてプログラム・ダイレクターの須田徳衛氏と私である。書記は結婚したばかりの日系人ハーフの若い女性。私が9月3日に深川研修者を案内した状況を克明に電子メールで報告しておいたので、その機転さが話題になった。

この夜、私は腹痛で熟睡できなかった。胃痙攣のようなが、胃の痙攣ではなく、精神の緊張からくる腹全体の痛みなのだそう。指圧を施して、ようやく小時間の眠りが取れた。

第9日目(9月8日、水曜日)

今日は迎えの車がない。今晚ジョージのところでは開かれる日加親善協会主催の歓送パーティーに、私が研修者を連れていかなければならないからである。昨夜の役員会でケン松本氏を誘うこと、ビールは半ダース持ってくる、と言い渡されたのだが、目覚めてから、いつそんな暇ができるだろうかと臆げに考えた。

スターバックスでコーヒーとペーストリーを買って、元RCMP(国家派遣警察)

のあったフレーザー・バレー・ヘルス・リジョンへ早めに出かけた。コーヒーを飲みながら、外の公衆電話から、ケンこと松本氏に電話してみたが、応答なし。まだ工場に出勤していないらしい。

すがすがしい駐車場で散歩しながらコーヒーを味わい終えたところで、小林・坂本両氏を乗せたペットカウ氏の車、次いで荒井氏を乗せたハケ城夫人の車が来た。まずは彼らの荷物を私の車に乗せ、それから建物に入って、ボブ・グリーン氏との面会を乞うた。

案内された会議室では、オーバヘッド・プロジェクターによる医療サービスの概略説明がなされた。2年前までの医療区域は5つの区域に分散されていた。そして、人材医療器具の購入等で重複するムダ、情報処理方法の違いによる連絡の難しさがあった。予算削減を目的として、一つの組織に統合されることによって、これらの問題は今、徐々に解消されつつある。「つつある」というのは、総合的な情報処理のコンピューター化は、まだ完成していないからである。

情報処理の責任者であるニール・クーリー氏は日本生まれで、16歳になるまで日本の川崎にいたそうである。日本人らしい人柄ニールは、しかし「私の日本語は古くて幼稚です」と言って、日本語で話すのを遠慮していた。

そこでの一般説明が終わると、ボブの車の後に付いて、MSAホスピタル、即ちマツクイ地区、スマス地区、アボッツフォード地区担当の、市内の病院を訪ねた。これは5区域の1つにある総合病院であり、本部事務所を持つ。五区域とは、ミッション、チルワック、ホープ、ケントの各区域であるが、病院のないのはケント区域だけである。

病院はベッド数が足りないほど狭いので、事務はほとんど、ポータブルの仮設ルームで行われている。私達の通された会議室は狭苦しく、説明された内容も医療専門の言葉が多く、しかも時間が足りないため通訳の時間も満足にできず、快適なものではなかった。説明に当たった1人で、病院の見学を案内したジャネット・ベイリー女史は日系人二世で、戦時中はアルバータ州の南部レイモンドにおられた方だが、彼女も日本語が少し話せたものの、残念ながら通

訳の役に立つ程ではなかった。

病院内の見学は救急病棟に始まって、外来患者の治療室、精神病病棟、産婦人科、小児科病棟、外科手術待機室を見て回った。

また、その途中で5分ほど屋外を歩かされて、長期療養の病棟に入り、その中を一巡した。私には牧師をしている時、その後も時々日系人を見舞ったことがある病棟なので、馴染みのある所である。

それが済むと病院職員の食堂でサンドイッチにジュースの昼食を共にした。先ほどのニールやボブも加わり、日本の病院との比較の話になった。深川市には私立の病院が多いのでアボ市側は驚いていたが、逆にアボ市では、1つの病院でどうしてやっていけるのか、深川市側は不思議だったらしい。

アボ市では救急病棟を除いて、病人はまず家族がかりつけの開業医の診療所、またはウオークイン・クリニックに行き、医師の紹介があって初めてこの病院へ来るのである。その前に必要な検査類は、一切病院とは別の建物で済ませなければならない。こういった組織の基本的な違いが認識されずに一方的な説明がなされたので、深川側の人達も何を聞いているのか、分からなかったのだろう。

病院とお別れして、私達が次に訪問したのは、この研修で唯一の民間企業、ゴールデン・バレー・フーズという鶏卵と果物加工食品の会社であった。しかし、まず案内されたのは、事務所があるこの建物から自動車で5分程離れた養鶏農場である。驚いたことに4万羽を1棟に入れた3棟の養鶏場を管理しているのは、案内に立ったデイビッドと他2名である。3人で卵から雛を孵化し、育て、卵を生ませ、卵をあつめ、そして6ヶ月で殺して、産卵鶏を新しくしている。鶏はケージに入れられ、餌、水の供給、糞の始末そして卵の収集は自動的に行われる。3つの棟からコンベアで集められた卵は、1ヶ所で容器に乗せられ、一番始めに訪れたパッキング工場へ送られるのである。なんとも荒ましいばかり、という印象の鶏卵製造工場であった。

それから戻って、まず食品加工の部門を見学した。案内してくれた副社長のラルフ・ペイン氏も食品加工の建物に入る時は、ヘアネットを付けなければならない。その氏が我々のヘア・ネット姿を見て「キュート」と言うのである。

ベリーその他の果物の加工品原料は他の工場で製造され、ドラム缶に入れられてこのパッキング工場の2階へ送られて来る。それが瓶詰めされるまでの過程を、2階から始めて、1階まで順序よく見せてもらった。作業が始まると、ガラス瓶の騒音で、見学するには心地よいものではなかった。しかし見学の終わりには、その製品を1箱、記念に頂いた。

鶏卵はサイズの選別も洗浄もせず、ここへ送られて来る。洗浄、選別、包装という作業の中で、人間のする作業は、自動機械の操業を助けるか、機械の末だできないことをするだけである。せっせと卵を生むために生きている鶏も、せっせと機械に使われて働いている人間も、何か同じようにみえて来るのが皮肉だった。

事務所の会議室で、ラルフ・ペイン氏の説明がもうすぐ終わるといふ所へ、エアード・フラベルが若い女性と一緒に入って来た。そして説明が終わった所で、カメラを数台、体に巻き付けた女性が入って来た。それでやっと私は、新聞社の人達だということが分かった。

カメラの女性が「急いでいるので、先に写真を撮らせてくれ、できれば会社の名前がある外のトラックを背景にしたい」などと口早に話している。「自然に話しているポーズ」を素人なりに演じた撮影を終えて、会議室に戻り、本格的なインタビューが始まった。

「カナダは初めてですか、どんな印象を受けましたか。研修の目的は、研修で教えられたこと」「ええとですね、景色は深川と良く似ていますね。皆さん、とても親切で、これが初めての海外旅行でラッキーでした」「深川市の人口はアボ市の4分の1ですが、市の予算は4倍です。市役所の職員の数もそのくらいです」「みなさん仕事熱心で、仕事に誇りをもってやっている、という印象を受けました」「女性が男性と平等に、しかもいろんな要職についているのが素晴らしいです。日本もこんなになったら、と思います。」（「そうかしら、そんなになったら困るんじゃないかしら」）「深川市は毎年、ヨーロッパの社会福祉体制などの研修に職員を派遣していたのですが、去年アボツフォードと姉妹都市の提携をしまして、アボ市の市政研修となったのです」「日本は単一民族の国ですけど、

カナダはいろんな民族からの移民でできています。そしてその民族の違いに対し、細心の注意を払っているという点が印象的でした」「アボ市は1週間位の滞在では、十分知り尽くすことは無理ですね」「深川の主要産業は米作りです。減反政策が敷かれていますので、反当りの生産性を高めるため、機械導入がされています」「米の他にじゃがいも、玉ねぎ、きゅうりを作ります。いちごやさくらんぼ、りんごも作っています」「今度、アボ市に来る時は、家族を連れて来たいですね」これまでに口数が少なかった研修者の3人だが、通訳の時間が無いほど、心の内に秘めていたことをべらべら語りだした。

もう一つ民営産業の見学としてコスコに連れて行って見たが、ただ広い大きいというだけで、感銘は受けなかったようである。疲れていたというせいもあるのかもしれない。パーティーのための買い物は他の店で考え、コスコではポップを飲んだだけ、店を軽く一巡しただけで引き上げた。

リッカーストアへ行く途中で、ケン松本の自動車修理工場を尋ねた。パーティーに出て来て欲しいと言うと、急な招待であったにもかかわらず、出て行くとのこと。有り難かった。そして工場の中へ連れ込まれ、ケンの道楽でしている携帯用の犬小屋、本棚、ヴァイオリンの製作工場を見せてもらった。

リッカーストアでは酒、日本のビールを買った。酒の1本に値段がついていなかった。その間2分位のものなのだが、列ができて、その一番後について刺青の男が「チャイナマンはのろい、列を塞いでいる」と言ったので、私とその男に向かって「我々はチャイナマンではない」と怒鳴ってやった。男は意外にも「恐れ入りました」という顔で黙ってしまったが、店を出て車に入ると、もう1人の男が私達の後からやってきて、ウインドーを下げるよう指図した。ウインドーを下ろすと、「俺達の全部が全部、あの男のようではない」という。あの男の非礼を遠回しに謝っているのだ。

それからオーバーウエイターというスーパーストアへ行き、鮭、鱈、牡蠣など、パーベキューにして食べたいものを買った。

それでも、まだパーティーまでには時間

があったので、ミル・レイクに連れて行き、桟橋で魚つりしている老夫婦を観察しながら、1日の疲れからボーっと空を見上げていた。近くでは野鴨が戯れている。池の遙か離れた中頃ではギースが羽を伸ばしている。「ようやく研修も終わったみたいですね」独り言のように私が言うと、煙草を吸っていた荒井氏は「そうですね」とだけ答えた。

パーティーは主に日加親善協会の役員だけだったのだけれど、ケン松本や彼のガールフレンド、レノラ・ゲイブ、そしてリタ水野の新郎ジェレミーが加わることによって、一層にぎやかになった。エド・ブライスは奥様のジニーと娘さんのアラナとで、早くから来てパーティー準備の手伝いをしていたらしい。須田徳衛氏は柔道を教えなくてはならないので出席できなかったが、エアードも奥様のシーラと出席し、飲み物よし、食べ物よし、会話よしの申し分ないパーティーとなった。

私は寛ぎたかったので、「俺はもう通訳しないから」という宣言をしたのが良かったのか悪かったのか。エアードは抗議の声を上げたが、彼とて日本語を習っているのだからと、私は受けつけなかった。普段口数の多いエアードがボツリボツリ話をするのと対照的に、ケン松本がこの時とばかり、福島弁の訛りを利かして過去の体験談を深川勢にトクトクと話していた。

私は、神学の勉強を始めたばかりというジェレミーと、神学の話に夢中になったのだが、リタが私のところに来て、「オイスターはどうなればでき上がりなの？」と聞いてくるので、私もジョージとリタのパーベキューを手伝うことにした。ナイフで蓋を開けて見ると、もう中身はスモークド・オイスターの姿である。次々と蓋を開け、皿に並べて皆に進めると、またたくまに無くなった。

しかし、私は鈍い腹痛を覚えはじめ、ビールがまずくなり始めた。小林氏は今晚、須田氏のお宅の宿泊する予定である。それで小林氏を柔道場まで連れて来るよう頼まれている。あまり飲んではずいと思っていると、パーティーはお開きになった。手をつけなかった日本酒は後日、私達役員の間で飲むこととした。

柔道場は柔道の練習が終わったところで、例によって2・3人の者がビールで、喉を潤していた。普段なら私もこの中にい

るのだが、柔道の練習をしなかったせいか、一緒に座ってもビールを飲む気になれない。腹痛のせいだろうか。この夜もじつくりと眠れなかった。

第10日目(9月9日、木曜日)

最後の日だ。昨夜も腹痛でしばらく寝付かれなかったが、指圧で痛い腹の中央部を圧したら少しはおさまったようだ。グラハムが7時半に迎えに来て、市内の大学、ユニバーシティ・カレッジ・オブ・フレーザー・バレーに行く。朝早くから父兄付き添いの新入生の姿、これから入学案内を手にする若夫婦などが、素通りする。

荒井氏を乗せたジョージ、坂本氏を乗せたエアードがやって来た。エアードは、絵の勉強のため、今日ヨーロッパへ旅立つというお母さんとお別れのため、昨夜はあれから坂本氏をお母さんのところへ連れて行き、それから私営のスポーツ施設でビールを飲みながら、深川市職員の給料の話をしたとか。小林氏を乗せた須田先生(私の柔道の先生)も、定刻にやって来た。

この朝は出発までの1時間に大学の見学を軽くする、というもので、国際教育学部のリンダ・ブラウン女史が案内役を勤めた。彼女も深川で数ヶ月滞在し、英語を教えた経験がある。見学は国際教育学部から始まって、ESL(第2言語国語としての英語学習)の部屋、図書館、教材資料室、コンピューター室(全学生が電子メール・アドレスを持ち、インターネットの使用が可能だそう)、自然科学実験室、物理、そして教授研究室に行ったが、学部長は不在で面会できなかった。後は美術科の学生の展示を素通りして、時間がないので、国際教育学部に戻ってお別れとなった。私の知っている大学の半分も見えていない気がする。

9時では遅すぎるというグラハムの忠告で8時45分に大学を出発し、私達は一路バンクーバーの空港に向かった。日本語ばかりの会話でグラハムには済まなかったけれども、今後のためにもと思い、深川の3名に幾つかの質問を敢えてしてみた。「宿

泊は、ほとんど毎日違う家族のところ泊まりましたが大変だったでしょう?」「色んな人達に会えて、良かったです。言葉の不自由を痛切に感じましたけど、何とか通じるものですね。これからもっと本格的に英会話の勉強をしなければ、と思いました」「家庭の内部を知る機会になって良かったですよ。食事の前にちゃんとお祈りするでしょう。素晴らしいというか、珍しい経験をさせてもらったと思います。普通の観光パッケージでは、決して経験できないことですよ」「あの中休みが息抜きになりました」「毎日3人がバラバラに泊まった訳で、3人で連絡や反省の時間がなかったでしょうね。ホームステイも悪くはないけど、皆さんの場合、研修のために来ている訳だから、ホームステイは1・2回にして、後はホテル宿泊の方が良かったかもしれません。それで、今回の研修で何か物足りないとか、もっとこんな所を見たかった、というものはありませんか?」「深川の子供たち(中学・高校生)が毎年お世話になっていますから、その担当のキャシー・オヘアさんと会いたかったですね。」「キャシーさんは、あの国際教育学部の事務室の中にオフィスを持っているのですが、時間が早かったせいか、残念ながらまだ出て来ておりませんでした」

荒井氏は「深川を出発する前に、来年の代表団受入のことでお願いするようお願いつけられてきたのですが、ようやくトリッサさんの所でのパーティーの後で言えて良かったと思っています」「そうですね。あのスピーチは良かったですよね」と私が言うと坂本、小林の両氏もうなずいていた。

次いで荒井氏が、昨夜ジョージの家で一時間もブラインドと悪戦苦闘し、酔いが覚めてしまった話をしたら、第1日目の夜そこに泊まった小林氏が、「あれ?同じだ」と、ブラインドを開けようとしているうちに戻らなくなって、ブラインドは諦め、今度は窓を開けようとしたのだけれども、開け方が分からず、寝苦しかった、という話を2人で話し出した。

「ジョージさん、あのブラインドを直したようだけど、この外国人たちは一体何しているのか、と思っているだろうね」と互

いにクスクス笑っていた。

それからグラハムと飛行場での手順の話をして、ふと振り向くと、深川の3人は一応に首を後ろにのけぞらせ、眠っていた。

この日は、別れにふさわしく小雨模様である。出発ゲートの近くに車を止め、荷物を降ろすと、インド系のポーターが音もなく現れ、台車に乗せてくれた。車を駐車場に入れるグラハムと別れて、内部に入ると、大きいラインアップの無かったのには、やれやれと思った。これからサンフランシスコに下るという3人は、まだまだ旅の途中である。

チケット・カウンターで、このあと搭乗までの指図を聞くのに、荒井氏が各飛行場の図面を取り出して聞いていた。チケットを扱っていた20歳前後の若い男性がもう1人に向かって、「この人達、図面を持ってるぜ」と感嘆の意を現していた。日本人旅行者の用意周到さもさるところながら、それを素直に驚き、言葉に表すところは、見ていて気持ち良いものである。

そこで正式なお別れとなった。「いろいろとお世話になりました」とは形式的に言うけれども、私も深川からの研修職員の人たちも、真意と疲れを込めた挨拶だった。私は帰り道、グラハムの手前、眠りに落ちることはなかったけれども、家に着くと、バツリ倒れ、その午後はぐっすり眠り込んでしまった。

3日後の日曜日に教会へ行くと、ジョージとエアードは来ていなかったが、受付の女性から始まって、かなりの人から「新聞に出ていたの見たよ。良いスマイルしてた」という挨拶を受けた。私が普段むっつりしているのを批判してのことか、スマイルをことさら奨励するためなのか知らないけれど、我が教会のヒーローとでもいった口振りの扱いだ。残念ながらその時点では、私はその写真も新聞記事も読んでいなかったが、悪い気はしなかった。

腹痛も眠れたお陰で無くなったようだ。

読破、お疲れさまでした。読み終えた感想は、いかがですか。私は、随所で光景を思い浮かべながら(まさに、パーティアルリアリティー)、笑いをこらえたり、風土の違いを感じることができました。そして、私が海外でお世話になった通訳のことも思い出しました。

機会があれば、ぜひ、アボツフォード市を訪れてみたいものです! (編集長記)

